

紀行文に描かれた近代の草津温泉

関 戸 明 子

**Kusatsu Spa described in some works of travel
writing in modern times**

Akiko SEKIDO

紀行文に描かれた近代の草津温泉

群馬大学教育学部社会科学教育講座

関戸 明子

一 はじめに

本稿では、草津温泉を対象とした紀行文を題材として、温泉を訪れる人びとの視点に立つて、明治から昭和初期にかけて草津がどのように捉えられていたのか、どのようなイメージで認識されてきたのか、考察を試みる。

まず紀行文をめぐる議論についてふれておきたい。藤田（一九八五）は、明治二〇年代から四〇年代にかけて「紀行文の時代」ともいえる時期が現出し、盛んに紀行文が書かれ、かつ読まれた時代があったと指摘した。その要因に、①鉄道の敷設によって地方への関心が高まったこと、②近代化政策の一つとして日本全土の地理的掌握が必要とされていたこと、③日露戦争の勃発による日本国土への愛国心的関心の高まり、④欧州の風景論紹介により起こった自然への興味などをあげる。

また持田（一九八六）は、明治二〇年代から三〇年代に行われた鉄道の全国的敷設を直接的要因とし、地方の地理、風俗を観察しうる旅が大きな意義をもって時代に君臨したとする。しかし、旅への志向が

文壇における「紀行文の時代」を全的に成り立たせたわけではない、人々は貪るように紀行文を読み、己が身は家に留まったまま、旅の軌跡をなぞった、それは実際に旅行する事とは区別されるべき心の働きである、と述べている。

こうした紀行文の位置づけについては、五井（二〇〇〇）の指摘とも重なる。五井は、読者にとって〈紀行文〉と〈ガイドブック〉の違いは、ガイドブックの読者／旅人が「書を持って」実際の旅に赴いたのに対し、紀行文の読者は紀行文を「読む」ことで空想上の旅行を行ったことにあると指摘する。

藤森（一九九七）は、柳田國男が昭和二年に行った講演「旅行の進歩及び退歩」で、明治二、三〇年代以来の旅行の「黄金時代」は、「読書生は大抵同時に旅行家でもある」時代だったと強調していることを受けて、読書としての旅行、旅行としての読書、この二つの行為が現実的に結びついた形態が、アームチェア・トラベルであると述べる。そして永井荷風と田山花袋の小説を例にとつて、ツーリズムの想像力に導かれながらアームチェア・トラベルが消費されていたことを考察した。

また、島津（二〇一一）は、田山花袋を民間地理学者として論じ、彼の初期紀行文を読解した。さらに、島津（二〇一三）では、田山花袋の紀行文論をクロノロジカルに検討し、彼のテキストは地理学史の文脈で読まれるべき側面を多く有していることなどを指摘している。

このように明治二、三〇年代以降、旅行と読書が結びつくなかで、紀行文・地理書の出版の中心となり、その隆盛をますます促進していったのが博文館である。草津温泉については多様な紀行文が残されているが、本稿でも博文館から刊行された著作を複数取り上げることになる。

なお、本稿で使用する史料には不適切な用語や表現があり、ハンセン病に対する差別的表現がみられる。本稿では、歴史的文脈を尊重して原典のままとしている。また、表題や引用文で用いられている旧字体は原則として新字体に改めている。

二 草津への道程

紀行文の検討に入る前に草津へ至る道程について概観しておきたい。鉄道開通以前、東京から草津へは、中山道の高崎宿から烏川沿いに道を行き、大戸、須賀尾を越えて草津に至る道程が一般的であった。また、吾妻川流域にある沢渡、四万、川原湯といった温泉は、強酸性の草津の湯でできた糜爛（ただれ）を治す仕上げの湯として知られており、こちらの道を使う人びとも多かった（図一）。

主要な民営鉄道が国有化されて、全国の幹線が国有鉄道として統一された一九〇六（明治三九）年の時点では、上野・大宮・熊谷・高崎を結ぶ高崎線、高崎・軽井沢・長野・新潟を結ぶ信越本線、高崎・前橋・桐生・小山を結ぶ両毛線が営業していた（関戸二〇〇九）。

高崎・渋川間と前橋・渋川間では、馬車軌道の敷設が先行し、両者とも一九一〇（明治四三）年に電化された。渋川・中之条間では、一

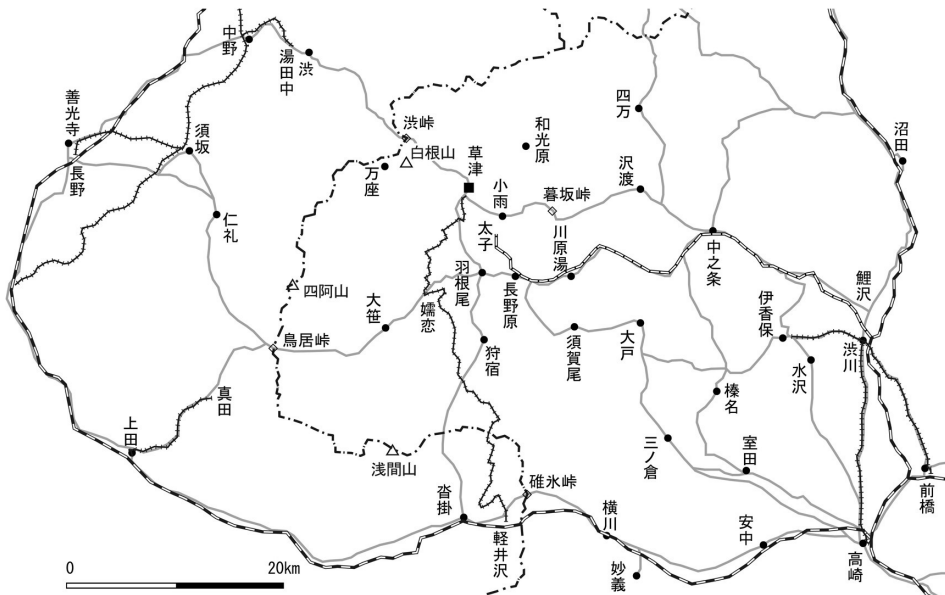


図1 昭和初期の草津温泉周辺の主要道路と鉄道

九一二（大正元）年に馬車軌道が開業し、一九二〇年に電化された。しかし、乗合自動車との競合により、一九三三（昭和八）年には早くも廃線となっている。

ガイドブックに掲載された交通案内をみると、一八九五（明治二八）年には、鉄道で高崎駅または前橋駅まで出て、そこから渋川までは馬車軌道を利用し、あとは馬車・人力車・駕籠・徒歩で向かう、もしくは軽井沢駅から人力車・馬・徒歩で向かうという行程が示されている。東京から一日で草津に到着することは困難であった。

軽井沢からは、一九一五（大正四）年に草津軽便鉄道が開業し、一九一九年に嬭恋駅まで延長、一九二四年には草津電気鉄道と改称して電化された。嬭恋駅からの延長は遅れたが、一九二六（大正一五）年、軽井沢と草津温泉を結ぶ五・五キロメートルが全線開通した。

また、上越線は一九二一（大正一〇）年に高崎から渋川まで、一九二四年に沼田まで、一九三二（昭和六）年の清水トンネルの完成によって全線開通している。

一九二三（大正一二）年の案内では、軽井沢と嬭恋を結ぶ軽便鉄道があり、渋川・中之条間の軌道も電化されていた。しかしながら、軽便鉄道を使っても、東京からの移動には丸一日かかるほどの時間を必要とした。そして一九二七（昭和二）年の案内をみると、草津電気鉄道が全線開通したことで、東京を朝一番に出れば夕刻には到着できるようになっている。

一九三一（昭和六）年以降、道路の改修や自動車の普及が進んだ。一九三五年の『省線自動車吾妻線案内』によれば、同年一二月に、渋川と長野県の真田を結ぶ吾妻本線と渋

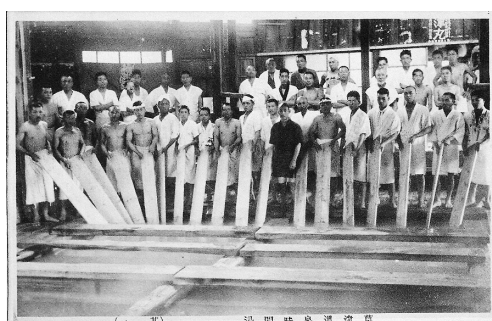


図2 時間湯の絵はがきセット
(発行時期：1918-33年、筆者蔵)

川と草津を結ぶ上州草津線が開業を開始し、草津まで直通で二時間半とある。一九四〇（昭和一五）年の案内には、渋川駅からの省営バスがあり、軽井沢から約三時間かかる鉄道よりも優位にたつようになった。なお、長野原線（現吾妻線）は一九四五年一月に群馬鉄山の鉱石を輸送するため開業したが、旅客輸送を始めたのは戦後のことである。

このようにして鉄道で結ばれた大正期以降、草津温泉では客層が多様化して、長期滞在の湯治客だけではなく、避暑やスキーなどを目的とする保養・遊覧客が増加して観光地化が進んだ（関戸二〇〇九）。

なお、次の章でみるように、いずれの著者も時間湯に言及しており、これが草津を語るときに欠かせない要素だったことがわかる。時間湯とは、①みなで揃って板で湯をもみ、成分を均一にして温度を下げる、②一〇〇〜二〇〇回、ヒシヤクで頭部に湯をかける、③湯長の指示で高温の湯に三分間浸かる。これを一日四〜五回繰り返すというものであった（図2）。時間湯の光景は、草津の名所絵はがきの題材としてもよく使用されていた（関戸二〇一二）。

三 七人の紀行文

以下では、七人の著者による紀行文を検討する。訪れた年代や書誌情報については、表1にまとめた。この選択にあたっては、時系列に捉えられるよう配慮したほか、旅行案内的な説明よりも、個人的体験や印象を語っているものを取り上げるようにした。

表1 対象とする作品

草津への来訪年	著者・書名・出版社など
一八七九(明治一二)年	大槻文彦『上毛温泉遊記』『復軒旅日記』富山房、二〇三二頁、一九三八年
一八九三(明治二六)年	田山花袋『草津』『二日の行楽』博文館、二七四〇二七六頁、一九一八年二月
一八九三明治二六)年・一八九七(明治三〇)年	田山花袋『温泉めぐり』博文館、一一八〇一二二頁、一九一八年二月
一九〇六(明治三九)年	坪谷水哉『草津入浴記』『山水行脚』博文館、六七〇七六頁、一九一二年
一九〇八(明治四二)年	大町桂月『草津温泉の二十五日』『関東の山水』博文館、三四二〇三五二頁、一九〇九年
一九二〇(大正九)年	若山牧水『上州草津』『静かなる旅を行きつゝ』アルス、一三一〇一四四頁、一九二二年
一九二七(昭和二)年	はやし生『草津への旅』『旅』一九二七年四月号、七二〇七四頁
一九三五(昭和一〇)年頃	吉田団輔『草津温泉』『季節の旅 山・海・温泉』新日本社、一六一〇一六四頁、一九三七年

1 大槻文彦『上毛温泉遊記』

大槻文彦(一八四七〜一九二八)は、一八七九(明治一二)年九月に草津を訪れた。その時の紀行文が『上毛温泉遊記』である。大槻は、伊香保に約一ヶ月滞在ののち、九月六日午前五時、博物学者・田中芳男とともに伊香保を発ち、榛名湖を経由して中之条から四万に向

かいそこで宿泊した。七日、日向見葉師堂へ散策後、昼頃、牛飼いに荷物を負わせて出立、新道を行き、和光原、引沼、京塚を経由して、夜一時に草津到着、山本十一郎の宿に泊まった。八日は草津滞在。九日早朝に山駕籠を雇って出立し、暮坂峠を経て、沢渡より馬を雇い、中之条に宿泊。一〇日、人力車で出発、五町田より山駕籠を使い、午後二時に伊香保に到着した。道中の描写も詳細である。

市中の湯場凡一八処ありて、一市の家皆硫烟の中にあり、凡器物の銀銅鉄類の物は皆腐蝕す。(略)皆路旁に就きて浴場を造りかけたれば路行く人に見透かさるるなり。(略)御座の湯は専癩病に効ありとし、浴者は皆其患者なり。(略)瀧の湯は市街の中央に東西四十余間、南北十余間なる浅き湯池ありて湯垣とて垣を繞ぐらし、其内熱湯一面に沸き出で湯の烟空を覆ひて物凄く、その池の東一方一丈許、俄に低く湯の落つる処に長屋造の浴場ありて竈にて十余の湯瀧とす。是瀧の湯なり。天狗の瀧何某の瀧など名あり。逆上に宜しなどといへり。脚気の湯は専、其患者のみ入る。皆足のみ浸す。温まる湯なりと云。鷺の湯は其熱さ、熱の湯に次ぐ。和の湯は半は水交りて効なしとて、一遊の旅人のみ入るなり。(略)熱の湯は特に浴法ありて、其の状実に人をして胆を寒からしむ。(略)其の浴するの熱度は華氏百廿五度なり「筆者注、五一・七℃」、(略)此の湯は殊に梅毒に効ありとし、浴する者は大抵経久痼疾に陥りし者にて皆此熱湯に病を投ずるは死ぬると癒ゆるとの両途なりと決心し、実に此の熱に死ぬる者往々ありといへり。近年県庁よりも種々其の弊を論され、此の浴場の旁に警察の交番所などもあれど、愚民更に従はず、此の熱ならでは効なしとし、(略)甘んじて此の危厄を踏めり。(略)此の熱の湯は市街の中央湯垣の西北路旁にあり。(略)早朝浴場を開かんとする時、隊長先出でて湯の差口を塞ぎ柝を撃ちて人を呼べば、市中遠近の旅店より浴者皆来り集る。其体を見るに身

の内皆爛れて陰部殊に甚しく、皆綿などあててあり（略）皆よろ／＼と歩む。男女裸体となり打交り騒がしく入り立つ。初め各一枚の板をとり湯槽の四辺に立ち、声立てて湯をかきまぜて熱を殺ぐ。これを湯を揉むといひ板を揉板といふ。揉む事凡十分間許にして隊長掌を鳴らして止むれば、長き板を数枚槽の上に亘し皆板の上に蹲まり、柄の短き柄杓にて皆俯して頭部に熱湯を汲み上げ／＼注ぐ。初めに斯くして後に入らざれば、体のみ熱して眩迷すと云。頭に注ぐ事凡三百盃程なるべし、皆頭も面も真赤になりて煤^{すす}であげたるが如し。隊長又柄杓にて槽の舷を叩けば皆湯に入るの装を為す。弱き者、新参の者は足袋をはき、又は肩身に布など纏ひ皆揃ひて、板に両手を突き張り足よりそろ／＼と入るなり。入る時に隊長声をあげて「三国一の名湯——」といへば皆異口同音に「有り難い」と和す。隊長を首として（略）一同身動きもせずして沈む。（略）沈み居る間は凡二三分間許にして隊長、「暖つたらそろ／＼出やう——余は煤^{すす}つたらの誤りなるべしと思へり——といふを合図に一同我先にと跳ね出づ。其熱き事如何ぞやと思ふばかりなり。余が見たる時は、此一度に入りたる者凡五六十人許なり。（略）盛なる時は此浴場の四辺に三百人も集ると云。最初に入るを一番と云、次なるを二番、三番と云。二番の群よりは湯を揉まず直に頭に注ぎ入るなり。四番程にして止め。婦人は多く二番三番に入る。（略）斯くすること一日に五六度なりと云。（略）熱湯に沈む間に堪へず、又一人先出づる事能はずして遂に眩して斃るる者あり。斃るれば「アガツタ」といひ一同に板の間の上へ引き上げ、水注ぐ。蘇する者は蘇し、体弱き者は遂に死ぬるもあり。実に此の熱の湯の現状を見て、余、田中君と且驚き且呆れ醜臭野蠻残酷、亦これに超ゆるもの無かるべし。

大槻は、熱の湯に恐れをなして一度も入浴していなかったが、宿に

引いた内湯はぬるいので、一度は試みるべきであると勧められ、四二度ほどの湯に入ったものの、無病のものは危ない湯に入るべきでないと、再び入ることはなかった。命懸けで熱の湯に入る人びとのさまは、それほど強い印象を与えた。ちなみに、草津の光泉寺境内には、湯治中に亡くなった人びとを供養するために一九〇〇年に建てられた「入浴逝者之塔」がある。

なお、大槻はこの紀行の抄録を伊香保で岸田吟香に渡しており、「上野四万草津沢渡遊記抄」として九月二二日から二九日の『東京日日新聞』に掲載されている。二六日の『東京日日新聞』には熱の湯見物の感想を「焦熱叫喚大叫喚の地獄も今ま初めて目撃せり」と記している。広く読者に時間湯の実情が伝わったことに注目しておきたい。

2 田山花袋「草津」「一日の行楽」と『温泉めぐり』

つぎに多くの紀行文を書いた田山花袋（一八七一一一九三〇）を取り上げる。『温泉周遊 東の巻』（金星堂、一九二一年）には、草津は三度行ったとして、①信州の渋から峠を越して白根に登ったりして、暮坂峠を越えて、四万から伊香保へ行った。②須坂から峠を越して、万座から草津に行き、六里ヶ原を越して軽井沢へ出た。③川原湯から草津へ行って、同じ路を引き返して来た、と記している。①は草津の熱湯の湧き出している池の中に娘が落ちたときとあり、その事故は一八九三（明治二六）年一〇月二四日『読売新聞』に「草津の美人釜茹となる」と報道されている。②は「浅間横断記」（『続南船北馬』博文館、一九〇一年）にある一八九七（明治三〇）年八月のとき。③は『田山花袋研究 年譜・索引篇』に一九一八（大正七）年七月草津方面への旅とある。

まずは①一八九三年の経験にもとづく「草津」をみたい。田山は、草津と別府が両大関であると位置づけて、草津を「烈しい温泉」「女などには余り向かない温泉」と捉えている。また、昔の方が栄えた

あるのは、「草津千軒江戸構え」といわれた一九世紀初めの文化文政期の繁栄を指している。時間湯のことも「軍隊的組織」で一斉に出入りする、「頗る奇観」と紹介している。

温泉の湧出量の盛んなのでは、草津は日本にもめづらしい。また、此処と別府温泉とが日本での兩大関である。(略)

草津は高原の上に位置してゐて、海拔も三千尺以上である。従つて夏は涼しい。確か蚊もあまりゐなかつたと覚えてゐる。唯、遠い山の中にあるので、交通が甚だ不便だ。(略) 沓掛から、浅間の凹処を越して六里ヶ原を通つて、鳥居峠の街道に出て行くのが一番近いが、これでも十二三里はあると思ふ。

昔の人々は、ゆつくりした気分で、この遠い山を越えて、その温泉に五十日も六十日も滞在してゐたらしい。従つて、今よりも却つて昔の方が、草津は栄えた。あらゆる娯楽の方法も整つてゐたらしいと思はれる。癩病患者なども大変に行つた。

草津には、私は信濃の渋温泉から入つて行つた。(略) 枯木林立した暑い峠路で、草津に近づけば近づくほど、緑の樹立がなく焼石が磊々してゐる。つまりその附近に、白根の活火山があるからである。(略) 焼石と火山灰と砂ばかりで歩きにくいこと夥しい。まご／＼すると、尖つた石で足を傷けたりする。(略) 頂上に登ると、湯釜と涸釜とが二つ並んでゐて、湯釜の方からは、白煙が朦々として颺つてゐる。(略) 白根登山は、草津湯治客の散策地、探勝地とされてゐる。(略)

草津には、大きな旅館が底を並べてゐる。皆な二階三階建てである。町中には熱湯が流れてゐて、湯気は凄じく立つてゐる。烈しい温泉といふことを誰も感ぜずにはゐられまい。それに、硫黄泉の烈しい臭が町中に漲つてゐる。女などには余り向かない温泉である。(略) こゝで有名なのは、例の熱の湯で、一時間以上もかき廻し

て、そして軍隊的組織で、一斉に入つたり出たりするのがある。頗る奇観である。

兎に角、草津は一度は行つて見るべき温泉場である。十月以後は、戸を開けて了ふやうな温泉場である。

文末では、草津の宿を閉じて小雨などに下りて、そこで冬を越した冬住みに言及している。薬師堂の縁日である旧暦の一〇月八日に店じまいをして、里に下り、同じく縁日の四月八日に草津に戻つて店を開くのが習わしになっていた。この習慣は一八九七年まで残つた。ちなみに『一日の行楽』を補訂した『東京近郊 一日の行楽』(博文館、一九二三年)では「十月以後は、戸を開けて了ふやうな」という箇所が「冬は雪に全く埋れるやうな」と書き改められている。

もう一つ、『温泉めぐり』の中で、草津のことを記している箇所にもふれたい。これも明治中期の草津を捉えたものといえる。「世間に近い感じはしなかつた」「衰へた温泉ではない」「男性的である」という独特の表現を用いている。草津では、温泉そのものの性質が世間の人々を惹きつけ、長期滞在によつて金もたくさん落ちたとある。

草津は昔からきこえた温泉場だけあつて、感じがわるくなかつた。想像してゐたのとは違つて、何方かと言へば、ひらけた広濶とした位置にあるけれども、またその展け方が伊香保や箱根の強羅あたりとは違つて、高原の上にあるながら平野の中にあるやうな気がするけれども、それでも高燥な気があたりに漲つて、有馬とか、道後とか、城の崎とかいふ温泉のやうな世間に近い感じはしなかつた。開けたやうで、そして何処か山の中といふ感じを持った温泉であつた。

草津の全盛期はしかし今ではなかつた。今よりは却つて昔の方が栄えた。(略) それと言ふのも其処に来る浴客は、少くとも五十日

や六十日はそこに淹留^{えんりゅう}する準備をして、遠い山路を五日も六日もかゝつてはるばるやつて来るのであるから、何うしても今のやうに一夜泊つて翌朝すぐ立つて行くやうな客とは、客としての気分が違ふ。娯楽の機関も従つて発達すれば、諸芸人も多く遠くから入り込んで来るといふ形で、おのづから金も沢山に落ちた。(略)

つまり温泉そのものの性質、癩病とかまたは今の所謂花柳病とか、昔の医業では何うすることも出来なかつたやうな患者が『草津に行つて来れば、治るものは治る、いけないものはいけない』と云ふ信仰を持つて、そして皆なそこに出かけて行つたので、それでさういふ風に、その遠い山の温泉が世間の人々を惹いたのである。

(略)

しかし、今とて、草津は決して衰へた温泉場ではない。浴舎も三層二層相連るといふ風で、設備はかうした遠い山の中とは思はれないほどすぐれてゐる。それに、湯が烈しくつて好い。道後や、有馬や、城の崎のやうなあんな衰へた温泉ではない。また伊香保、塩原、箱根のやうな女性的な温泉ではない。飽^あまで男性的である。

(略) ちよつと行つただけでは、余りに烈しすぎるので、気味がわるくなる位である。(略)

この烈しい熱い湯に、更に少しも水をうめずに、ある一定の間、軍隊組織の懸声で入浴するのであるから、人間も病気を治したいとなると、随分無茶なことをやるものだと私は思った。

3 坪谷水哉「草津入浴記」

坪谷水哉(一八六二～一九四九)は、博文館の総合雑誌『太陽』の初代主筆を務め、一九一八年には日本図書館協会会長に就任している。

『草津入浴記』は一九〇六(明治三九)年八月、草津に一週間ほど滞在したときの見聞をまとめたもので、草津に至る行程の記載はない。文中には、湯治を終えて人力車、駕籠、馬などの乗物を使って出

立する人びとが描かれている。また、湯ただれで歩行が困難な浴客が集まってくる姿をアヒルの行列に喩え、ただれが出ない間は浴客として幅が利かないといい、短くとも三週間、長いと七八週間の長期滞在の湯治客が多いこと、「世間のハイカラ風」はいまだ侵入せず、客の待遇法が一七八世紀頃と変化がないと述べている。明治後半には、ほとんどが湯治客で「自炊」により滞在していたのである。

薬師堂の鐘が、午前四時を報ずると間も無く、早発^{はやだち}の客が、前夜に注文したる渋川行きの人力車、沢渡や渋温泉行きの駕籠、軽井沢行きの馬など、早くも準備して旅館々々の店先に来り、声高く呼び起せば、忽ちにして雨戸を開く音、薙^{しとみ}を上る音、ガラ／＼と賑やかに、頓^やがて客の座敷へ帳場の番頭や女中の往来二三回ありて、会計も済みだりと覺しく、縁側より押鷹^{おうちょう}に乗物に乗り、宿の主人始め家の者大勢に、町端れまで送られて、威勢好く出発するは最も景気好き客なり。(略)

忽ち聞く午前五時の時間湯を報ずる種々の鳴り物の中に、喇叭^{らっぱ}は熱の湯、鈴は松の湯、拍子木は白旗の湯なり。近く湯畑を囲んで鼎^{かなべ}の如くに位置を占めたる浴場は、各各鳴物で浴客を招集すると、家々の客室から、浴衣の白きがゾロ／＼と、左手に手拭またはタオル、右に柄杓を携へ、まだ昨今到着したるは元氣好けれど、十日乃至二週間も経たるは、股間、腋下^{むもと}など、激しく糜爛^{みらん}れて、歩行自由ならねば、股を広げて家鴨^{あひる}の行列の如く、各自に平生入浴する浴場にと来り集まる。最も多き熱の湯は、同時に三百人ほども集まり、他の松の湯も大抵之に匹敵し、白旗の湯は百人位に過ぎず。浴場に集まりたる浴客中、身体^{からだ}の激しく糜爛^{みらん}れたる者は、滞在の久しきだけ知己も多く、他の人々之を劬^{いた}はりて、暫らく傍に眺め居れど、自余の者は、浴衣脱ぎ捨て、各各に、浴槽の傍に備へたる幅七寸、長さ六尺許りの板押つ取り、片端を湯中に入れ、一列に並んで、ハ

ア、コリヤコリヤ、ドツコイドツコイと懸け声勇ましく、調子を揃へて湯中を攪拌す。(略)斯かる作業の総指揮者には、何れの時間湯にも、湯長、俗に隊長と名くる者あり。(略)隊長は、数々柄杓を以て湯を自身の頭に注ぎて熱度を試験し、大約三十分時間を攪拌したる後、最早入浴に適すると認めたる時、手を拍て攪拌を制止む。此時の熱度は大抵百二十度、隊長の頭は一種の寒暖計にて、柄杓で冠り検して、一度でも其の熱の加減を誤まるることが無い。

今まで湯の中を攪拌はす用に供した板は、急に浴槽の両端に橋の如く列ねて架け、板と板との間は二尺ほどづゝを隔て、浴客は其の板の上に行儀よく並び座し、タオルまたは手拭を蔽ふたる頭を低く板の間に垂れ、直径三寸、深さ三寸、柄の長さ五寸ほどなる柄杓を以て、槽中の湯を汲んで頭に注ぐこと大抵百回乃至二百回、是で先ず熱湯中に入るも逆上して眩暈する危険を予防し、斯くして一同の準備が出来ると、隊長は正面なる時計の下に立ち、号令して曰く、『御準備が宜しければソロ／＼下りませう』

『揃つて三分——』之れが一同浴槽中に身を沈めたる時、先づ隊長が下したる号令である。(略)戦々兢兢として身を下して脚を槽底に着けたるとき、是から三分間は、決して自由の行動を許されざる命令に接したるなり。勿論一人にても身を動かして湯を煽れば、他の者は熱に襲はれて堪へ難くなるなり。(略)一槽の中、一回約五六十人の浴客、大官、紳商、車夫、馬丁、貴賤平等、上下無差別、尽く隊長の号令に服従して、唯だ其の顔を板の上に現はし、一号令ごとに、『オーイ』と一斉に叫んで、之に和するのみ。頓て一分間経てり。

『改正の二分——』之が隊長の第二の号令なり。(略)暫らくして『限つて一分——』と号令す。さア其頃になると、浴客は皆な顔色が火の如く赤くなり、口を開いてホー／＼と大息するものあれば、齒を食ひしばつて気を張り詰めるもあり、一呼一吸、氣息次第に困

しむ。隊長ジツと見詰めて之を慰さめ、『ハアチツクリ御辛抱!』、浴客の顔色は益々赤く、呼吸は愈々荒くなり、最早堪へ難きが如し。(略)今は絶体絶命と覚悟して、次なる号令を待てば『ハア辛抱の仕どこだツ』と叫んで未だ上槽を許さず。最早眼も眩むばかりとなる一刹那、『サア、そろ／＼上りませう』と叫ぶ頃には、既に号令が何と云ひしか耳にも留まらず、一斉に両手を左右の板に懸け、ザブリツと音させるや否や、湯出蛸の如く赤くなりたる老幼一同の身体は、忽ち皆な板の上に在る。

(略)号令の下に、第二組、第三、四、五の各組、入り更り立ち更りて、総て三百人に近き浴客が、尽く第一回の時間湯を済ます頃、客は次第に元気を快復し、柄杓やタオルを携へ、中には此等を茶屋の女に托し、例の家鴨に似たる怪しげの歩行にて、各々其宿に帰る。

第一回の時間湯を済まして後、始めて朝餐に向ふが浴客日課の一なり。此地の浴客は、皆な自炊制度にて、最も贅沢なるは一室に一人の定雇といふ下女を使役して飲食を調理させ、然らざるは数室共同にて一人の女中を使役し、飯を炊ぐ、惣菜を調べさせる、火鉢に火を起す、室内を掃除する。(略)

トツトツト——の喇叭、チリンチリンの鈴、午前九時に第二回の時間湯開始を報ずれば、浴客は例の如く入り慣れたる浴場に集まり、規定の如くに浴了つて室に帰る。此時最早正午に近く、午餐済ましての散歩地は、市街の四方を繞らす高丘の中に、南に薬師堂、北に白根神社、西方には金比羅社、賽ノ河原などあり。然れども歩行に悩むほど塵爛れた者には、大抵一室に閉居して、唯だ雑談に時を消すばかりなるも、流石に温泉の効能は顯著にて、塵爛の為に半身不随なる者も、元氣は極めて旺んに、食欲も甚だ進み、長き一日を五回の入浴と、三回の食事とを以て、唯一の課業と為す者多し。

土地は海拔四千尺の高所、四面は皆高山で囲まれ（略）通げるにも隠るゝにも路の無い別天地なれば、世間のハイカラ風は未だ此土地に侵入せず。千年以来の温泉地といふにも似ず、客の待遇法は依然として十七八世紀頃と変化なく、総ての客は自炊にて、席料、夜具代、米味噌、油代、湯銭等の名目にて賄ふ制度なれば、避暑客遊覧客の為には、不便を感じること多きも、無用の経費は極めて稀に、シカも贅沢を好めば、料理屋も数軒あり、芸妓も二十数人あり。（略）シカシ浴客の大部分は例の時間湯に入て、一生懸命に治療を専門とする湯治客にて、短かきも三週間、長きは七八週間も滞在するが多く、盛暑の候、最も浴客の多きときは、一時に三千人を普通と為すとぞ。（略）また旅館は大抵家々に内湯を備ふ。（略）湯量は極めて豊富に、何れも硫黄泉とて、湯の底には黄色の硫黄を堆積し、湯は多量の硫酸を含み、其の味は酸味を帯び、久しく浴するときは、身体中の皮膚柔かき部分に糜爛を生ずるなり。然れども此所へ来ては、糜爛の出ぬ間は、浴客として幅が利かぬ。（略）

滞在一週間許りなる余は、糜爛も発ねば、幅も利かず、屋は山に登り、大弓を引き、夜は燈下で時間を消すに困しみ、毎日見るまゝを此所まで書きつくる（略）。

このように「揃つて三分」「ハアチツクリ御辛抱！」といった湯長の号令や「湯出蛸の如く赤く」なつた湯治客が活写されている。

図3は、当時の湯畑周辺を描いた鳥瞰図である。熱の湯、松の湯、白旗の湯のほか、脚気の湯、綿の湯、大滝の湯といった共同浴場がみえる。こうした浴場に湯治客は毎日数回通つたのである。この図の右上にある下屋医院の下屋学は、坪谷に自著の序文を依頼している。その著書『草津鉱泉療法』（下屋学、一九〇七年）の序で坪谷は、草津では数百年來の習わしで旅館制を採つておらず遊客向けではないことを惜しみ、旅館の改良を望んでいる。

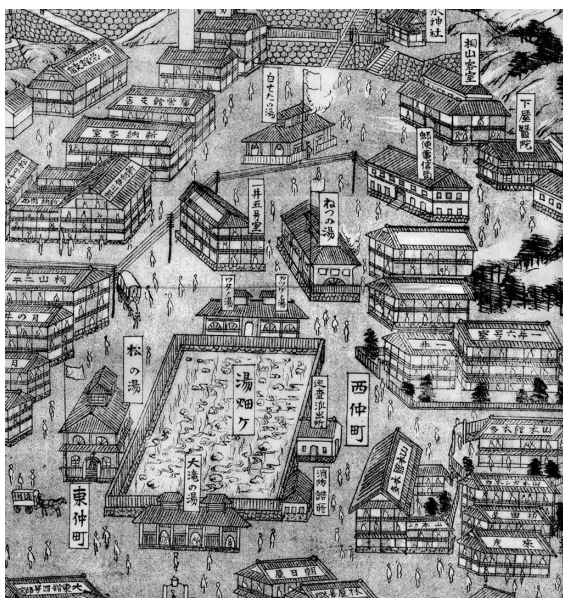


図3 「上州草津温泉場略図」部分
（一田屋常吉編輯、1905年、筆者蔵）

4 大町桂月「草津温泉の二十五日」

坪谷の二年後、一九〇八（明治四一）年の暮れに、詩人・随筆家の大町桂月（一八六九～一九二五）が草津に滞在した。大町は十月下旬に家を出て、赤城山、吹割の滝などを周遊。沼田から馬車で鯉沢へ向かい、そこから吾妻川沿いを徒歩で行き、途中馬車に乗つて中之条を経て沢渡に宿泊した。翌日、徒歩で暮坂峠を越えて草津に到着、二五日間滞在した。帰路は川原湯、中之条、渋川で宿泊し、一二月三〇日に帰京している。湯治客だけでなく、遊山客が増えていることに言及している。文中にある「下屋氏」とは前述の『草津鉱泉療法』の著者・下屋学のことである。

石倉翠葉に宛てた一二月四日の葉書が『桂月全集 第二二卷』（桂月全集刊行会、一九二三年）に収録されている。白根山、殺生河原、軀仙の滝などを見物し「草津は思ひの外の勝地に候。兄の草津のしを

りを始め、いろ／＼の案内記を見申候。兄の著は是非訂正せられたきものと存候」と記している。引用文では省略した箇所もあるが、草津周辺の勝地についても詳述している。文末にみえる泣き灯籠は草津の街外れの運動茶屋にあり、別れを惜しんだ場所として知られていた。後述の6の紀行文でも、この場所への言及がある。

草津温泉は、温泉場として、天下無類の特色を有す。在来、温泉と云へば、必ず先ず指を草津に屈せしも、偶然に非ず。東京に、硫黄花をわかつ風呂あれば必ず草津の名を冠するを以て見るも、その草津の効能が世に知れわたりたるを知るべし。されど、東京の諸処の草津温泉の白濁せるを見て、本家の草津も亦然るべしと思はゞ、これ大に誤れり。本家の草津温泉は、すき通るばかりに澄んで居る也。(略) 酸性峻烈、強く人の体を刺す。(略) 浴し居れば、必ず、『たゞれ』を生じ、あらゆる病毒を駆除し去る。(略) これに於て、時間湯なるものあり。その数、六七、各、湯長ありて、号令して三分間を限りて入浴せしむ。一同揃つて、板にて湯を揉む間に、運動もすれば、湯気をも呼吸して、げに、一挙兩得のみにあらず。その時間湯の熱度、百二十三度より百二十五度に及ぶ。『あらく笑し、風呂へはいるに号令かけて、揃つて三分、改正の二分、残つて一分、ちつくり御辛抱、辛抱のしどころで飛び上る』と云へる俗謡は、よく簡単に時間湯の有様を説明せるもの也。時間湯の外、総湯もあり、内湯もあり、湯瀧もあり。温泉の性質の強烈なるのみならず、涌出の量の多きこと、実に天下無比也。湯畑を始め、白旗の湯、地蔵湯など、いづれも直に小川を成すばかりに熾に涌出す。西の河原の如きは、温泉、絶壁より出でゝ流れて溪となり、かゝりて瀧となる。(略)

草津温泉は、花柳病と癩病とのみに非ず、心臓病、肺病を除きては、あらゆる病気に靈効ありといふ。近年は、病人以外の遊山客も

増加したる由也。(略) 今の処にても、一年二十万の客ありといふ。他日更に交通の便加はり、旅館の改良をはからば、避暑の客、遊山の客も多くなりて、草津当年の繁華を回復することも、決して難しとせざるべし。

草津一五瀑の名あれども、観るべきは、常布と姫仙との二瀑也。

(略) 西に元白根の谷を上れば、氷岩とて、夏日も氷ある巖窟あり。草津よりほんの十二三町の程也。なお十二三町も上れば、殺生河原あり。硫黄一谷に薰じて、鳥獸の屍骸を見る。獅子岩は、形似によりて名あり。(略) 白根山頂の四池、小蓋の池など、池の数は十数もあれど、いづれも小也。(略) 小蓋池の浮島、鸚鵡岩、みな遊客の徒然を慰むるに足る。げに、白根の活火山を控へたる草津温泉は、関東の一大勝地と云ふべき哉。(略)

葉研の底ともいふべき草津温泉場を流るゝ湯の川の上流を西の河原と称す。賽の河原の字面を改めたる也。(略)

下屋氏、隣房の客、宿の主人、みな笹碁の好敵手、二十五日の間、一日も暮うたぬ日はなし。をり／＼下屋氏の家に飲み、酒樓にも飲みぬ。草津の地は、今や浴客幾んど無くなりて、心のどかに冬籠りせむとす。われは、いつまでも、山中にのんきになりても居られず。(略) 日頃相識れる人々、泣燈籠までと云ふを、この天気なればとて、辞すれど、なお五人ばかりは送りに来る。

5 若山牧水「上州草津」

一九二〇(大正九年)年五月、歌人の若山牧水(一八八五―一九二八)が草津を訪れた。「溪ばたの温泉」(『静かなる旅を行きつゝ』アルス、一九二一年)と「上州草津」によれば、彼は渋川から軌道馬車で中之条へ行き、川原湯に宿泊して歌集を編むため一〇日間滞在している。そのうち五月二〇日に徒歩で草津に向かい、一井旅館に宿泊。翌日早朝、渋温泉へ出発した。なお「みなかみ紀行」で知られる旅

は、一九二二年のことで、軽井沢から草津軽便鉄道を利用し、嬭恋からは自動車で草津に向かい一泊している。草津と中之条を結ぶ暮坂峠には若山牧水の詩碑がある。

彼が泊まった一井旅館は、熱の湯のすぐ裏手にある(図4)。この

旅館は一九〇七(明治四〇)年に建てられ、洋風の要素を取り入れて三階建ての前面に連続するアーチをつけた外観をもっていた。

「上州草津」には、「宜しくばそろく下りませう。」

「揃つて三分。」「改正に二分。」「限つて一分。」「ちつくり御辛抱」「辛抱のしどころ。」「サツ宜しくば上りませう。」という号令とともに時間湯のことを詳述しているが、重複するので省

略した。



図4 熱の湯と背後に一井旅館
(発行時期：1907-1918年、筆者蔵)

坂を降りて突き当りの一井旅館といふへ入る。西洋まがひの大きな建物だか、今は余り客はないらしく、ひっそりとした二階の一室に通さるゝと共に私はぐつたりと横になった。時計は十二時を少し過ぎてゐた。歩いたのは僅か五里ほどだか、何といふことなくひどく疲れた。(略)

硫黄色に濁つた内湯に入る。この地の湯は直ちに人の皮膚を糜爛さすと聞いてゐるのでまさか一日や二日ではと思ひつゝも何となく気味が悪くて長くは浸つてゐられない。匆々に出て昼飯を呼ぶ。一

杯飲みながら縁さきの欄干の陰にまだ充分さきかねてゐる桜の蕾をぼんやり眺めてゐると、突然一種異様なひびきの起るのを聞いた。

(略) それは私の室のツイ前面に建つて、多角形をしたペンキ塗の建物の中から起つてゐるのだ。その建物は疑ひもなく浴場である。

さう思ふと私は直ぐ感づいた、噂に聞いてゐた草津の時間湯の浴場が其処で、あの笛はその合図に相違ないと。(略)

案のごとくその異様な響きの止むか止まぬかに何処からともなく二人三人、五人六人づゝ怪しい風態をした浴客が現れてそのペンキ塗の家にぞろ／＼集つて来始めた。まことにそれは何といふ不思議な、滑稽な、みじめな姿であることぞ。普通にちやんとした足どりをとつて歩いてゐる人としては殆んど一人もない。(略) すべて湯の強さにあてられて皮膚の糜爛を起してゐる人たちであるのだ。男あり、女あり、皆襦袢^{どち}袍^ち姿で、それ／＼に柄杓を持ちタオルを提げ、中には大きな声で唄か何かをどなりながら、えつちらおつちらやつて来るのである。やがて浴場内では拍子木の鳴る音がした。

私は大急ぎで飯をすまして其処に出かけて行つた。そして恐々ガラス戸の破れから中を窺き込んだ。(略)

私は一心にそれらを見詰めてゐるうちに自づと臉の熱くなるのを感じて来た。今は珍しさや好奇心などの境ではなくなつて、一心になつた多人数の精神が其処に一種の物凄さを作つてゐるのを感じるのだ。見たところ、さして眼に立つ病人風の者はゐない、が、斯うした荒行の入浴法がどうしても人に或る真剣さを覚えさせずにはおかぬらしい。それが相寄つて一種の鬼気を成してゐるのである。

(略)

見終つて何となく頭の重くなつたのを覚えながら、私は其処を離れた。恰度そこへ宿の番頭が来て見物の案内をしようといふ。それをば断つて自分一人でぶら／＼歩いてみることにした。私の見た時間湯(それは熱の湯と呼ぶるのであつたが、其他全部で六個所に

在り、それぐ毎日四回づゝの入浴にきまつてゐるのだ相だ」の直ぐ側にまた眼を敬たゝしむるものがあつた。湯畑といふので、やゝ長方形になつた五十坪ほどの場所一面に沸々として熱湯が噴出してゐるのである。一面に大小の石が敷き詰められてあるが、硫黄が真黄に着いたそれらの一つぐの蔭から間断なく湯の玉の湧きつらなる様は誠に壯観である。場内には幾つかの大きな桶の様な物が設けられて硫黄を採つてゐる。

徳川三代將軍が其所の湯をどうかしたといふ札の掲げてあるその柵に添つてとろぐと曲り下れば旅館や商店のぎつしりと建ち並んだ狭苦しい賑かな街路に出る。宿屋などは下よりも二階三階と次第に大きく造られた様にも見えるものなどがある。(略) その街を通りすぎた所に一つの激しい溪が流れてゐた。何の気なしにその側に立寄ると、思ひもかけぬかなりな熱気がむつと面を撲つて來た。即ちこの溪は諸所に湧いた温泉の末が一つの溪流を成して流れ下つてゐるのである。

その湯に沿うて尚ほ少し下るとその道の行きどまりになつた所に瀟洒な裸木の門があつた。誰に訊くまでもなく私はそれも兼ねて噂に聞いてゐた癩病患者の入浴場と定めてある湯の沢であることを直覺した。(略)

山道であつたり、道草を食つたりして來たにせよ、今日歩いた五里の里程に合せて私の疲労が普通でなかつた。殊に身体より心の方が余計に疲れてゐた。そして妙に感傷的になつて、見るもの聞くものにつけ、すべて可笑しいほどおどくする様になつてゐた。さうした心に映つた草津は、この大きな高原の窪みに出來てゐる年古りた温泉場は、余りにも不思議な境界であつた。今まで知つてゐる温泉場に較べての手触りが余りに異り過ぎ強過ぎた。いはゆる湯治の覺悟で來るならば又此処ほど信頼出來る湯はあるまいと思はれたけれど、(略) 兎に角一夜泊りの身にとつては何となく親しみ難いも

のがあつた。一巡り町を巡つて宿に歸つて來ると故知れぬ心細さが病氣の様に身を包んでゐた。実は二三日此処に滞在してそれから信州の渋温泉に越すつもりであつたが、いかにも氣持が落つかないのて明日すぐ信州の方へ入り度いと思ひ立つた。(略) この落ちつかぬ心を消すために夕飯を待ちかねて酒を取り寄せた。

飲みかけてゐると例の笛だか喇叭だかゝ鳴り出した。夕方の入浴時間が來たのである。なるほど、一個所でなく其処でも此処でも鳴つてゐる。そして庭を距てた前面の浴場からは程なくゴツトンぐといふ板の音が聞え始めた。次いで、その寂しい唄が其処此処で起つた。(略)

そのうちに附近に料理屋などあるらしく、賑やかな三味線の音が聞え出した。宿のツイ裏手の山の上にも雪の残つてゐるほどで、夕方かけて増して來た寒さと共に其処らに立ち騰る湯気が次第に深くなつた。そしてその中にそちこちとうるんだ様に電燈が点つてゐるのである。湯揉みの板の音がよくく烈しく、その唄も次ぎから次ぎと続く、そしてその間には料理屋の三味線の騒ぎが聞え、按摩の笛も混る。

若山牧水は湯畑から下つて滝下町を歩き、主屋の柱から腕木を出して柵をのせて一階よりせり出した「せがい出し梁づくり」の旅館をみている。そして湯之沢の門にたどり着いた。湯之沢は、明治中期にハensen病患者専用の療養地区として設けられた。温泉街と湯之沢には一九一五(大正四)年に関門が建てられ、応急隔離が講じられていた(加藤・山本一九九二)。また、「そちこち」電燈が点つてゐるとあるが、草津水力電氣(株)の創立により電燈が使われるようになったのは一九一九(大正八)年で、その翌年の光景が描かれていることになる。彼の心象風景には、草津は「不思議な境界」と映り、手触りが余りに異なつて強すぎる、湯治客ではない一夜泊まりの身には、何と

なく親しみ難いと述べている。

6 はやし生「草津への旅」

これまで、おもに徒歩で草津を訪れた紀行文を取り上げた。つぎに草津電気鉄道開通後のもので、雑誌『旅』一九二七年四月号に掲載された「草津への旅」をみたい。草津温泉駅は一九二六年九月に開業したため、この旅は一九二七年の中春のこととわかる。著者「はやし生」の本名・経歴は不詳である。『旅』は一九二四（大正三）年四月に創刊された旅行雑誌である。発行主体は日本旅行文化協会で、一九二六年に日本旅行協会と改称、一九三四年にはジャパン・ツーリスト・ビューローと合併し、戦後は日本交通公社（JTB）に引き継がれた。『旅』は二〇〇四年一月の九二四号で休刊するまで、七九年の長期にわたって、時代の旅行スタイルを作り上げていった雑誌と位置づけられる（森二一〇）。

著者は上野駅から信越本線に乗り、軽井沢からは草津電気鉄道を利用している。奮発して二等切符を買ったところ、車中で「二等で草津に行かれる様では、余程悪いのでせう」と同情されて困惑している。宿の風呂に入るとき、かぶり湯のことを知らずに教えられ、熱の湯も見学している。交通の便が良くなり、遊覧地へと変貌しつつある状況を描き、「都会人には親しみ易い場所」と位置づけている。

草津の町に着いた。此の附近の運動の茶屋も、草津節の、（送りませうか、送られませうか、せめて運動の茶屋迄も）に歌はれて居る様に昔から随分多くの、悲喜交々の、ローマンスを残して居り、冬はスキーマンに嬉ばれる、好スロープになつて居る。

漸く解放された様な気持で、外に出ると、此の様な山奥に良くこんな大きな家が沢山あつたもんだ、行かぬ先は随分辺鄙な所と思つて居たのが、以外に賑やかなので驚かされた。

我々同行二人の洋服巡礼は、少しも優雅な所がなく、大股歩きながら湯畑のそばの、N館に這入つて行く、「いらつしやい」と云ひながら、白い？手を付かれて、いゝ気持になり、座敷へ案内されて、「どうぞ御風呂に」と云はれるので、早速飛込んで行つた処、誰も居らぬので、いゝ気持で這入つてた。すると後から来た人が、そばにあつた、柄杓で二三十回も、湯を頭へかけて居る、「おい変な事をする人だぜ」「ウム」と二人共其の様子を見詰めて居る、そのうち御免なさいと云ひながら這入つて来たので「一寸御伺ひ致しますが、どうして湯を頭へかけるのですか」と聞くと、我々を新米とみて丁寧に教へて来れた（略）。（略）こんどは廊下を通る女中に「おい、ねえさん今日汽車で真黒になつたから石鹸を貸して呉れ」と云ふと、女中の奴笑ひながら此の湯で石鹸を使ふと、皮膚が黒くなつてしまふとの返事で、仕方なく其の儘出て来た。

湯上の気分の良いので、すっかり腹の空つたのを忘れて居たが、良く考へると未だ昼飯前だ、食後散歩に出て、夕べの草津をぶらりく。中春とは云ひながら、未だ附近には、純白な雪が、大部残つて居る、左の方には、白根の山が、慈母の如く立ち、前には湯畑の噴湯が、間断なく、湧き出る、草津の町より、他に出た事のない者は、川と云ふのは、湯が流れて居る処だと思つて居る位だ。慈まれたる草津の町、夏は避暑、冬はスキーに、常に客の絶間がない、交通の便が開けての今日草津は療養の草津ではなく、遊覧の草津と變つて来た、東京を終電車に、出ると午前の十一時には草津の湯に這入る事が出来る。（略）

其の内何処からともなく、大勢集まつて歌ふ声が聞えて来るので行て見ると湯屋だ、看板には熱の湯と書いてあるので一寸と驚く。大勢が裸体で長い板を持つて湯を揉みながら草津節を歌つて居る。其の内湯長が命令で一同静かに湯に這入る、（略）「サア、宜ければ上れ」の号令がかゝると、今迄の静かだつた湯が、猛りだして皆ん

な脱兎の様に飛出す景は、一寸想像が付かぬ。

そろ／＼寒くなつて来たので宿に帰り、早速失敗せぬ様、一風呂浴び来る。

地下からは湯川の流れの音が響いて来る、外からは、切々の思ひを三すじの糸に、含めた余音が聞えて来る。遠く山川越へて来た客との別れを悲しむ様だ。静なる山間の温泉、それは身も心も洗ひ落せる様だ。

高原の温泉、落葉樹の林、総てが、我々都会人には親しみ易い場所である。

7 吉田団輔「草津温泉」

吉田団輔は鉄道省旅客課の職員で、『季節の旅 山・海・温泉』のほか『温泉風物帖』（博文館、一九四一年）、『厚生温泉』（山河書房、一九四二年）といった著書がある。また『風景』八巻五号（一九三一年）に「草津一昔話」を執筆している。

文中で近く鉄道のバスが上田付近まで通うようになると記している。渋川と長野県の真田を結ぶ吾妻本線と渋川・草津間の上州草津線が営業を開始したのは一九三五年一月のことであった。吉田はバスで二時間半のドライブで草津に到着している。この旅の経験は省営バス開通直前の一九三五年と推察される。

吉田は「重くろしい暗い情景」との予想が「高原の明朗さと空氣の清浄さ」によって解消されたという。時間湯を見物して「昔ながらの湯治気分が滲み出て」いると述べつつ、短期滞在客向けのサービスを求めている。

草津の宿に腰を下ろして、まづ感じることは、空氣がいかに爽かで、自づと晴々しい呼吸の出来ることである。高地だから空氣が清澄で紫外線に富むことは勿論だが、学者にいはせると、町の中央

広場にある湯畑その他到るところから立昇る硫氣は、大氣中の一切の不浄物を自然に消毒するのだといふ。

草津といへば、性病患者や悪性の皮膚病患者ばかり集まつて、何となく重くろしい暗い情景を連想させるかも知れぬが、来て見ると高原の明朗さと空氣の清浄さにそれ等の予想はすっかり解消されて仕舞ふ。殊に真夏の頃でもあれば、筧で山から送られる雪解水（かきひ）はアイスウォーターそのもので、益々清浄感をそえられるのである。

温泉は頗る強烈で、昔から湯ただれに聞えてゐるが、旅館で一回三分間の入浴を一日二回に止めてをけば決してその心配はない。よしんば何等かの身に覚えがあつてもである。尤も街頭では股間に湯たぐれをつくつて、がに股に歩く不格好な姿を見ることは珍らしくないが、それはさういふ湯治法に従つてゐる人達の姿で、何も不氣味に思ふことはない。熱の湯その他五ヶ所の時間湯で、一日四回行つてゐる入湯振りを見るのも、草津の旅のよい土産である。草津節や草津小唄に合せて湯をもむ人達の手振りや足拍子も面白く、湯長の号令で湯に入る様も昔ながらの湯治気分が滲み出てゐる。

たゞ旅館が完全に湯治本位であることは、場所柄当然ではあるが、昔と違つて交通も便利になつたのだから、従来の方針はそのまゝ大切に守りつづけると共に、週末又は二、三日の休暇を利用して、この高原気分と温泉とに浸りたいと思ふ人々のために、適切な施設を別に加へたいものだ。だからといつてこゝを熱海などのやうに盛り場式にせよといふのではない。あの豊富な水を利用して、便所は水洗式にし、客室も近代様式の壁仕切に改め、女中のサービスも湯治湯式でなく、ビールのお酌や御飯のお給仕をお客自身の手に任せないことぐらゐにはしたいといふ程度のものである。つまり行届いた心身の静養境としての施設以上の要求ではない。

ところで、坪谷水哉も一九三五年に草津に行っている。四月二九日・三〇日の一泊二日の旅行で、その時の行程は、軽井沢に午後四時四五分に到着、貸切バスで北軽井沢の別荘地などを経て、ちょうど午後七時の時間湯が始まったところに草津に着き、一井旅館に宿泊した。翌日は朝一番の時間湯を見てから、朝食をとり、西の河原を散策し、除幕式間近のベルツ博士記念碑を見ている。午前一〇時バスで出発、川原湯で入浴と昼食を済ませ、渋川から上越線に乗って、午後六時に上野に到着している（坪谷水哉「草津温泉みやげ」『ツーリスト』一九三五年一〇月号、一八〇一九頁）。このように昭和初期には、短期滞在の旅行者も増えていた。

四 おわりに

大町桂月は『関東の山水』（一九〇九年）の序文で「参謀本部輯製の二十万分の地図、其測量に係れる二万分や五万分の地図などを備へ置き、野崎左文の著はせる『日本名勝地誌』を読み、所謂臥遊を為すこと久し。この外なほ、志賀矧川の『日本風景論』、山崎直方、佐藤伝蔵二氏の『大日本地誌』、高頭式氏著、小島烏水増補の『日本山岳志』などを読み、山水に関する知識を得、然るのち、旅行し居れども」と述べている。

輯製二十万分の一図は伊能忠敬の地図を基礎に作成されたもので、明治末期の測量図は、参謀本部から独立した陸地測量部が製作していた。五万分の一図の内地の測量が完了したのは一九二四（大正一三）年のことであったが（豊田二〇〇八）、大町は、地形図を手元に置きつつ書物によって知識を得ることを実践していたのである。

各地の名勝を紹介した『日本名勝地誌』は、博文館より一八九三年から一九〇一年にかけて、全一二編で出版された。志賀重昂の『日本風景論』（政教社、一八九四年）は、自然科学的な視点を入れて風景

を論じたもので、版を重ねてベストセラーになり、登山への関心を高めたことでも知られる。山崎・佐藤の『大日本地誌』は、博文館より一九〇三年から一九一五年にかけて、全一〇巻で出版された。佐藤・山崎とも東京高等師範学校教授で、山崎は一九一一年に東京帝国大学教授となり、のちに日本地理学会会長をつとめた。佐藤も日本地質学会の会長となっている。各巻とも地文・人文・地方誌からなり、地文は科学的記述が多いが、人文・地方誌は従来の記述とあまり変わらないとされるものの（石田一九八四）、近代的地誌としては画期をなすものであった。田山花袋もその編輯にかかわっていた（島津二〇一一）。高頭式編『日本山岳志』（博文館、一九〇六年）は、山岳に関する百科事典ともいえるもので、一三〇〇頁を超える大著である。

こうした書物を読んでから、旅行に出かけることは、取材旅行であれば当然のことかもしれない。そして大正期には、田山花袋・大町桂月など多くの旅行家が全国の山水を探り、新しい風景を発見していき、「山水」をテーマとした多様な著作が生み出され、山水ブームが起きた。こうして発見された山水に続々と都会から旅人が訪れるようになった（日本交通公社社史編纂室一九八二、六五〇六六頁）。柳田國男のいう読書生や知識人の楽しみから、旅行はより一般化していった。草津を目的地とする旅行も、病氣療養だけではなく、避暑や登山、スキーといった遊覧本位の客が増えていった。

紀行文からは、場所に関する作家のもつ主観的なイメージを見出すことができる。時代とともに草津に対する旅行者の捉え方は変容してきた。そのなかで、次の叙述は典型的な捉え方と位置づけられる。吉田団輔は「草津といへば、性病患者や悪性の皮膚病患者ばかり集まってるで、何となく重くるしい暗い情景を連想させるかも知れぬ」と述べても「来て見ると高原の明朗さと空気の清浄さにそれ等の予想はすっかり解消されて仕舞ふ」とイメージが一新されたと語る。そして、時間湯の見物も「草津の旅のよい土産である」という。ともあ

れ、いずれの著者も時間湯に言及しており、懸命に湯治する人びとの姿が草津を語る時に欠かせない要素であったことがわかる。

大槻文彦は「斃るれば「アガツタ」といひ一同に板の間の上へ引き上げ、水注ぐ。蘇する者は蘇し、体弱き者は遂に死ぬるもあり」という時間湯の現状をみて「驚き且呆れ醜臭野蠻残酷」と述べ、強い印象を与えた。坪谷水哉は「呼吸は愈々荒くなり」「今は絶体絶命と覚悟して」「湯出蛸^{ゆでたこ}の如く赤くなりたる」と、時間湯を懸命に行う人々のさまを描いた。著者たちは、読者として他の紀行文を参照したと思われる。若山牧水は「噂に聞いてゐた草津の時間湯の浴場が其処で」と関心を示している。紀行文の読み手を得ることによって、間主観的なイメージが形成されたといえよう。

一方で、はやし生は、かぶり湯のことを知らず、熱の湯の看板を見て驚いているので、ほとんど知識をもたず草津に來たことがわかる。旅行者の資質の変化が現れており、そうした人でも旅行雑誌に文章を書くことができたことは、旅行が大衆化した時代を象徴している。

【参考文献】

- 石田龍次郎（一九八四）『日本における近代地理学の成立』大明堂。
 加藤三郎・山本与四朗（一九九二）「湯之沢地区及び栗生楽泉園」草津町誌編さん委員会編『草津温泉誌 第貳巻』草津町役場、八二九～九〇二頁。
 五井 信（二〇〇〇）「書を持って、旅に出よう 明治三〇年代の旅と〈ガイドブック〉」『紀行文』日本近代文学六三、三二～四四頁。
 島津俊之（二〇一一）「経験とファンタジーのなかの和歌の浦…田山花袋『月夜の和歌の浦』を読む」空間・社会・地理思想一四、四一～六七頁。
 島津俊之（二〇二三）「田山花袋の紀行文論再考」空間・社会・地理思想一六、四七～六六頁。

関戸明子（二〇〇九）「戦前期における鉄道旅行の普及と草津温泉の変容」神田孝治編『観光の空間―視点とアプローチ』ナカニシヤ出版、一六～二五頁。

関戸明子（二〇一一）「絵はがきから草津温泉の景観を読む」『えりあぐんま一七、四三～五六頁。

関戸明子（二〇一七）「草津温泉の開湯伝説と歴史意識の形成」群馬大学教育学部紀要（人文・社会科学編）六六、六五～七八頁。

豊田友夫（二〇〇八）「陸地測量部について」測量五八一〇、六二～六四頁。

日本交通公社社史編纂室編（一九八二）『日本交通公社七十年史』日本交通公社。

藤田叙子（一九八五）「紀行文の時代（一）―田山花袋と柳田國男―」三田国文三、三三～三八頁。

藤森 清（一九九七）「明治三十五年・ツリーゾムの想像力」小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギ― 明治三十年代の文化研究』小沢書店、五〇～七一頁。

持田叙子（一九八六）「『紀行文の時代』と近代小説の生成―習作期の田山花袋を中心に―」国学院雑誌八七―七、一三～二九頁。

森 正人（二〇一〇）『昭和旅行誌 雑誌『旅』を読む』中央公論新社。

【付記】

本稿の骨子は、二〇一七年六月に開催された第六〇回歴史地理学会大会（於…愛知教育大学）において発表した。本研究は、JSPS 科研費（基盤研究（C）15K03004）の助成を受けたものである。

（平成二十九年九月二十七日受理）